



本 日 第2188回 2016年3月5日(土) No. 2073

本日のプログラム Today's Program

伊那RC・尾張旭RC交流例会

3月5日 中区錦 芳蘭亭 18:00 点鐘

ロータリーソング 「君が代」・「奉仕の理想」

3月6日 多治見カントリークラブ 7:45 集合

前 回 第2187回 2016年2月26日(金) 記 録

○斉 唱：「日も風も星も」

○ゲスト：2015 年米山奨学生

サギアンポーバーユニット ナティニーさん

出席者：会員 21 名中 15 名出席 出席率 71.42%

前々回補正出席率 2月19日分 90.04%



会長あいさつ 古橋 エツ子

DQN をご存じですか？ドキューンの意味です。キラキラネームと並んでドキューンネームとして知られていて、親が子どもに名前を付ける時に驚くような意味や響きを持った名前を付けたことからいわれています。例えば、愛保（らぶほ）、愛ん（あみん）、暴走蛇垂（ばくそうじゃあ）幻の銀侍（まぼろしのぎんじ）、△□ー（みよいち）、本気（まじ）、大大（だいだい）、女の子なのに賢一郎などです。アメリカで人気のDQN ネームには、Apple, Mac, Facebook, Tequila（テキーラ）、Moo（モー・牛の鳴き声）など。この他に中国などにもあります。ただし、キラキラネームは、就活の際にはねられることが多いので不利でもあります。親は、人と違う名前は個性的で良いという思いがあるのですが、キラキラネームを付けた親の1割以上が後悔しているそうです。

幹事報告

- ・ 本日の会合：次年度奉仕委員会
- ・ 次回の例会：伊那 RC・尾張旭 RC 交流例会
- ・ 例会変更のお知らせ：掲示板をご覧ください。

水と衛生月間／OFDY 月間

	3月 9日(水)	3月18日(金)	3月25日(金)	4月1日(金)
例会予定	11日(金)振替 創立45周年記念講演 講師 玄侑 宗久様 (芥川賞作家) 於良福寺会館	卓話担当者：OFDY委 員会 卓話者：山田直樹OFDY委 員長 演題：「OFDY月間に 因んで」	卓話担当者：金森 俊輔君 卓話者：" 演題：「小児科35年を 振り返って」	卓話担当者：古橋 裕志君 卓話者：伊豆原 浩二様 演題：「ひと言」

ニコボックス

○昨年の誕生日にいただいたランが、花芽を出しました。良い事がありそうでうれしいです。 古橋 エツ子君
○ギャップさん、これからも研究に励んで下さいね。

古橋 エツ子君

○本日、卓話を担当します、どうぞよろしくお願い致します。

加藤 清久君

○二日酔いは大じょうぶですか？加藤君の卓話を楽しみにしています。

箕輪 良孝君

○加藤清久さんの卓話に期待します。

富田 晃君

○名残り惜しかな、三浦さん、別るる一抹の寂しさ

長い間、クラブの為、全員の為に大変御苦労さまでした。ところで、クラブからは？

古橋 裕志君

○三浦さん、長い間お世話になり、ありがとうございます。これからもお元気で活躍して下さい。

丹羽 敏行君

○三浦さん、本当に長い間ご苦労様でした。ありがとうございました。

山田 直樹君・江尻 豪君

○三浦さん長い間ありがとうございました。たまには顔をみせて下さい。

西尾 輝久君

○ナティニーさん、ようこそ。最後の例会への出席になるのは残念ですが、健康に気を付けて研究に励んで下さい。応援しています。

丹羽 敏行君

○米山奨学生、ナティニーさん、ようこそおいで下さいました。

桜井 雅博君・高島 昇君

○ナティニーさん1年間の奨学生生活御苦労様でした。今後のご活躍を祈ります。

山田 直樹君

○古橋 裕志さん、大変ご迷惑をおかけしました。

これに、こりず、今後ご指導方お願いします。

加藤 清久君

卓 話



「技術的に見た昭和10年代」 加藤 清久

大東亜戦争を技術面から見た考察

大東亜戦争は、主流が海軍決戦であったと思います。海軍は、日露戦争の日本海海戦に勝って、その後、大艦巨砲の艦隊決戦主義を信奉し、昭和になって戦艦大和、武蔵等を建造しました、これが一番役立たずとなりました。日本は、大東亜戦争初期、空母、飛行機による機動部隊で真珠湾を攻撃、マレー沖でイギリス戦艦のレパルスおよびプリンスオブウェルスを撃沈しました。「時代が艦隊決戦から機動部隊決戦へ変わった」、この事実を、日本は正確に把握出来ませんでした、米国は、いち早く、ここに着目し、機動部隊こそ、この戦争を勝ち抜く鍵と

認識し、以降、空母の建造と飛行機の製造に全力をあげました。

結果、戦時中、米国の空母建造数は正規22隻、軽空母93隻の合計115隻、日本は9隻、9隻の18隻でした。(ちなみに、米国の正規空母エセックスは1隻も沈んでいません) 航空機、戦闘機の製造は米国9万機、日本3万機です。機動部隊の制空権の確保、それは戦闘機の優劣が一番の決め手になりました。日本の主力戦闘機はゼロ戦、昭和13年1月に設計開始、初舞台は、昭和15年9月13日、中国重慶において13対33で戦い27機撃墜しました。真珠湾攻撃でも活躍、空中戦の花形として活躍しましたが、米国に欠点を見破られ次第に、活躍できなくなりました。

欠点は、

- 1、軽量化による強度不足
- 2、操縦士の防弾装置なし、燃料タンクの被弾防御なし
(アリュウシャン列島で無傷のゼロ戦を回収され徹底的に研究されました)

そのような状況下、戦局が中盤から終盤に向かうにつれ、日本は、国防ラインを縮小せざるをえず、最南端をマリアナ群島としました。ここを失うと、B-29の航続距離から考えて本土直接攻撃が可能になるのです。乾坤一擲、昭和19年6月15日、日本の将来をかけたマリアナ沖海戦が始まります。しかし、この戦いは、日本の大敗で、今後、一直線に敗戦への道を進みますが、この原因は科学技術の大きな差でありました。その科学技術の差とは

- 1 VTC 菅 砲弾の中にVTC 菅を装備し、日本の飛行機の近辺に砲弾が届けば、反射電波に反応し炸裂する、当たらなくても甚大な被害をもたらします。
- 2 レーダー 360度、日本の状況を把握でき、事前に迎撃態勢がとれます。
- 3 F6F グラマン戦闘機、2000馬力のエンジンを搭載、ゼロ戦を凌駕する戦闘機です。

これにより、日本の航空機473機出撃し8割を、空母、大鳳、翔鶴、飛鷹の3隻を失い、機動部隊が壊滅します。当時の日本人は、精神論で頑張れば、大和魂で戦えば何とかかなと考えていましたが、真っ向から否定された厳然たる事実です。

幸い、戦後の日本は、この教訓を良く学び奇跡の復興を成しとげ、経済大国の仲間入りができましたが、将来に向かって、さらに、科学技術を磨き世界に貢献できる日本を構築しなければならないと考えている昨今です。

(蛇足ですが、大戦中、機動部隊の最高司令官を、年功序列で機動部隊の指揮経験がない人を決める日本、序列2桁のニミッツを人選、抜群の功績をあげさせる米国、この戦いが負けに終わることを物語っていますよね) なぜ、「あんな無謀な戦争をおこしたのか」等の詮索は、一世代の前の人にゆずることにして。

明治維新から終戦まで、77年、我が身が生きてきた同年数、よくも、ここまで、アメリカと勝負する国をつくったか、日本人は優秀だと言っても過言でないと思います。戦後、東洋の国々が独立できたこと、迷惑をおかけしたことは事実ですが、それはさておき、依然としての植民地主義が支配していたらと考えると、感慨深いものがあります。

